

巻頭言

「カズオ・イシグロ」

理事長 新谷 友良

毎年ノーベル文学賞では、村上春樹が受賞するかどうか話題になりますが、今年は日系イギリス人作家のカズオ・イシグロが受賞しました。昨年はボブ・ディランが受賞しており、ノーベル文学賞の選考委員会にはいささか距離を置くところが見えます。

カズオ・イシグロの名前は、いろいろなところで見聞きしていましたが、今まで1冊の作品も読んでいませんでした。それが、福岡伸一がどこかに「今回のカズオ・イシグロのノーベル文学賞受賞を聞いて、思わずガッツポーズをした」と書いていましたので、ミーハー根性を丸出しにしてさっそく kindle で「私を離さないで」をダウンロードしました。そしてはまりました。「日の名残り」、「遠い山なみの光」そして今「忘れられた巨人」を読んでいます。

ここ数年、翻訳物の小説はなんだか読む気がしませんでした。最近読んだのは、亀山郁夫が訳した「カラマーゾフの兄弟」とフリーマントルの推理小説、それから村上春樹が翻訳したレイモンド・チャンドラーの作品ぐらいです。外国人の書いた小説を読むことを遠ざけると、楽しみが随分減るし、感じ方も偏ってくるとは思いますが、食指が動かないのは致し方ありませんでした。

カズオ・イシグロは両親がともに日本人、イギリス国籍を取っていますが家庭で両親とは日本語で話をしながら成長したと紹介されています。しかし、作品は当然英語で書かれており、私が読んだ数冊も土屋政雄などが翻訳したものです。英国で成長した日本人が英語で書いた小説を、日本語訳で読んで、その小説にはまっているという構図です。

作品の風景は古い白黒映画のように静かで、登場人物も非常に抑制の効いた語り口で描かれています。「遠い山なみの光」の長崎・稲佐山の様子など、どうして英国で成長した人が、このように日本の湿り気といったものを正確に、淡々と描写ができるのか驚きでした。一方では、「私を離さないで」のように、人間にとって根源的な問題を登場人物の会話を通じてさりげなく私たちの目の前に持ち出してくれます。カズオ・イシグロの容貌は写真でしか見ていませんが、数冊の作品と容貌を重ね合わせて、今の時代が持つ数少ない知性ではないか、という思いを強くしています。